

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第51回 第11.2.2.1節～第11.2.3節

2020年2月1日

小田 勝

「11.2.2.1 「～の」「～に対する」が補われる連体修飾」の323頁から。用例(15)～(17)の類例をあげる。

・朝顔の姫君は、いかで人に似じと深う思せば、はかなきさまなりし御返りなどもさをさなし。(源・葵)〈源氏ノ文ニ対スル返事〉

・ありつる御返り、持て参れり。(源・松風)〈源氏ノ文ニ対スル明石君ノ返事〉

和歌において、飛躍のある「(物)思ふ+名詞」という表現がある。だいたい「(物)思ふ〔人ノ〕名詞」と解釈されるが、

・入り日さす峰にたなびく薄雲は物思ふ袖に色やまがへる(源・薄雲)

・鳴き渡る雁の涙や落ちつらん物思ふ宿の萩の上の露(古今221)

・昔思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ山時鳥(新古今201)

・都思ふ枕の下のきりぎりす我が泣く音をもあはれとや聞く(隣女集)

次例のような場合、その表現性はやや複雑であるようにも思う。

・物思ふ〔人ノ故ノ〕涙に影や曇るらん光も変はる秋の夜の月(風葉和歌集)

同頁「11.2.2.2 判断内容を表す連体修飾」。初刷・第2刷の、用例(4)「〔トノ〕恥」、用例(5)「ものは」は、下線が「〔トノ〕恥」、「ものは」のように表示されるべきで、第3刷で訂正した。324頁(1行目の)用例(6)の類例をあげる。

・そのこととなくて(=タイシタ理由モナクテ)〔手紙ヲ〕聞こえさせむも、なかなか馴れ馴れしき答めやと(=不躰デアルトイウ非難モアルカト)(源・早蕨)

次例は「軽々しき(=軽々シトノ)もどき」を反転させたものである。

・「世のもどき軽々しきやうなるべし。罪に怖ちて都を去りし人を、三年をだに過ぐさず赦されむことは、世の人もいかが言ひ伝へ侍らん」など、后かたく諫め給ふに(源・明石)

なお次例は、「浅いトイウおぼえ」ではなく、「おぼえが浅い(=軽イ扱イ)」の意である。

・〔玉鬢ハ〕いづ方にも深く思ひとどめられ奉るほどもなく、浅きおぼえにて(源・藤袴)

324 頁「11.2.2.3 飛躍のある連体修飾」でも、類例をあげておく。

- ・藤壺わたりをわりなう忍びてうかがひ歩^{あり}けど、語らふべき戸口 (=手引キヲ頼ムコトノ出来ル女房ノイル戸口) も鎖してければ (源・花宴)
- ・[句宮ヲ通ワセテ] かう [中君ニ] もの思はせ奉るよりは、[私ガ中君ト] ただうち語らひて、尽きせぬ慰め (=尽キセヌ大君ヘノ思慕ノ慰メ) にも [中君ヲ] 見奉り通はましものを、など [薫ハ] 思す。(源・総角)
- ・ほととぎす夜深き声 (=夜更ケニ鳴ク声) は月待つと起きて眠も寝ぬ人ぞ聞きける (躬恒集)
- ・磐余野の萩の朝露分け行けば恋せし袖 (=恋ノタメニ涙デ濡レタ袖) の心地こそすれ (後拾遺 305)
- ・奥深き箏の琴 (=奥深イ所デ弾イテイル箏ノ琴) の、平調に調められたる音の、ほのかに聞こゆるに (古本説話集 1)

次例は、分かりにくいのが、定通が通宗の弟で、通宗の養子になったのである。

- ・故通宗宰相中将の、弟を子にし給へりし定通の大臣 (増鏡)

「11.2.3 連体修飾語の係りかた」の 326 頁、3 つ目の◆の用例は、どう考えたらよいのだろう。次例も、連体修飾語と被修飾語の間に別の成分が介在しているようにみえる。

- ・いつかたの雲路ぞとだに尋ね行くなど 幻のなき世なるらむ (とはずがたり) <「幻ハ死者ノ魂ヲ尋ネニ行ク道士」>

この次に、節を新設する。

11.2.3' 句の並立と連体修飾(新設)

11.2.3'.1 連体修飾句の並立(新設)

連体修飾句が並立される時は、一般に「[…連用形、…連体形] + 名詞」の形であるが(「花咲き、鳥鳴く時」型)、

- (1) [親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる] 御方々にもいたう劣らず (源・桐壺)

上が「…て」の形になることがあって(「花咲きて、鳥鳴く時」型)、この場合、句の並立が気づきにくいから読解上注意が必要である。

- (2) [名香のいとかうばしく匂ひて、櫛しきみのいとはなやかに薫れる] けはひも、
人よりはけに仏をも思ひ聞こえ給へる御心にてわづらはしく(源・総角)〈「け
はひも」ハ「わづらはしく」ニ係ル〉

次例では、さらに「…の」による連体修飾も重ねられている。

- (3) [むつかしげなるわたりの、この面もかの面あやしくうちよろぼひて、むねむ
ねしからぬ] 軒のつまなどに[夕顔ガ] 這ひまつはれたるを(源・夕顔)

◆なお、連体修飾語の並置の句型は3型あって、283頁に①②③として示されている。

11.2.3'.2 被修飾語句の並立(新設)

連体修飾語の下に名詞が並立しているときは、(1)(2)のように、連体修飾語がその
双方に及ぶ場合と、(3)のように、及ばない場合とがある(佐伯梅友 1976)。

- (1) はかなき花・紅葉につけても心ざしを見え奉る。(源・桐壺)
(2) 雪降れば冬ごもりせる草も木も春に知られぬ花ぞ咲きける(古今 323)
(2) 立てば立つぬればまたみる吹く風と波とは思ふどちにやあるらむ(土左)

11.2.3'' 「連体修飾句+指示語+被修飾語」(新設)

連体修飾句を、指示語で一度受け直して被修飾語に続ける句型がある。

- (1)～(3) 626頁用例(21)～(23)をここに移動する。
(4) 飯いひに飢ゑて臥こせるその旅人あはれ(紀歌謡 104)
(5) 忘れにしその黄葉の思ほゆらくに(万 2184)
(6) 女のもとに方違へに行きたりけるその夜、いかなることかありけむ、朝に(匡
衡集・詞書)
(7) 四卷経書き奉るべかりしを、心の怠りに、え書き供養し奉らずなりにしそ
の罪によりて、きはまりなき苦を受くるを(宇治 8-4)
(8) あるかなきかに門かどさし込めて、待つこともなく明かし暮らしたる、さるかた
にあらまほし。(徒然 5)

[出典追加] 隣女集①飛鳥井雅有(1241-1301)③新編国歌大観 7

[引用文献追加] 佐伯梅友 1976「並立関係でまとまる語句」『国語研究』39